

〈前線／銃後〉のモザイク化と再編される男性性の暴力

海妻 径子

1. はじめに

これまでの戦争においては、〈銃後〉を担うことにも戦争責任はあるにせよ、〈前線〉において戦争暴力を直接行使することとの間には明らかな懸隔があるはずであった。女性兵士戦闘行為参加禁止規定に対するNOWの撤廃要求から、アブグレイブの女性兵士による拘束イラク人虐待事件へと至る、近年のいわゆる〈女性の軍事化〉現象の是非をめぐる議論も、〈銃後〉とは明確に分かれた〈前線〉の存在を前提に、そこへの女性の進出／動員の是非を問うものとして行われてきたのではないだろうか。

だが九・一一以降、「戦闘部隊、戦旗、前線、宣戦布告、停戦協定などの手段で、戦闘と殺戮の場所を決めて行われる」ものであった国家間の戦争に代わって、いわゆる〈テロリズム〉とそれに対する〈帝国〉の〈制裁／報復〉の応酬、という「新しい戦争遂行方式が誕生した」、とポール・ヴィリリオは述べている。「宣戦布告されずに始められたこの新しい戦争は、(略)敵の姿はみえず、前線というものもないのに、最大の損害が発生する」⁽¹⁾

だとすれば〈女性の軍事化〉現象もまた、この「新しい戦争」の登場をふまえて再議論されねばならないだろう。女性が新たに進出した／動員させられたはずの〈前線〉は、「新しい戦争」においてはもはや明確なかたちをとらなくなってきた、というのだから。

2. 〈前線／銃後〉のモザイク化

もちろん「新しい戦争」においても、暴力の直接行使者としての〈兵士〉は存在する。だがそれは、次々と〈前線〉に投入されては死んでいき、したがって女性を出産面で動員することによって補填を確保していかねばならない、総力戦の時代における戦争機械（クラウゼヴィッツ）の消耗部品としての姿とは、やや様相を異にしている。ステルス戦闘機からのピンポイント爆撃に象徴される、圧倒的な軍事力の非対称の結果、少なくともいわゆる〈帝国〉側における戦死は、総力戦の時代のそれに比べて極端に少ないものとなっている。泥沼化が言われるイラク戦争でさえ、米軍の死者は三年間で三千人に満たない。

このことは、戦争における女性の動員のかたちを大きく変えている。佐々木陽子が指摘するように、軍事力の拮抗する国家同士の総力戦においては、出産の面でも徴用労働の面でも女性の動員力が競われ、「女性動員のジレンマは、労働力確保と母性保護との間に生じた」（佐々木、二〇〇一、三八頁）。だが現在の圧倒的な軍事力の非対称は、〈帝国〉側においてはこのジレンマをミニマルなものにしつつある。イラク開戦直前、ラムズフェルド国防長官には、女性に対して「一子でも数多くの出産」を呼びかける必要もなければ、「徴用に応じて工場へ出よ」と呼びかける必要もなかった。彼がアメリカ国民に呼びかけ強調したのは、「これまでとまったく変わりなく、日常の生活を暮らし、仕事に通い、子供を育て、夢を抱くことのうちに、わが国の勝利は訪れる」ということだったのである。

しかしながらこのことは、女性も含め国民が戦争に動員されなくなったということの意味ではない。むしろ加藤哲郎が喝破するように「グローバル化のもとにある〈私たち〉は永続的な『従軍』状態にある」のであり、「〈私たち〉が『従軍』しているのは、（略）ヘゲモニー争奪の『内戦』をはらんだ『情報戦』だということなのだ。「ニューヨーク世界貿易センタービルやペンタゴン（アメリカ国防総省）ビルを破壊してある程度『陣地戦』的打撃を与えたとしても、その民衆的意味と効果は、むしろ『情報戦』の象徴的レベルで決定される。正統化できないテロや暴力は、『戦時体制』強化の格好の口実になる」（加藤哲郎、二〇〇四、二七―二八頁）。呼びかけを通じてラムズフェルドが行なったことは、アメリカにおける「日常の生活を暮らし、仕事に通い、子供を育て、夢を抱くこと」のすばらしさを強調することによって、その「日常の生活」を脅かすものを何であれ〈悪〉と決め付ける認識枠組みをつくりあげ、「情報戦」でのヘゲモニーを握ることだったといえるだろう。

正面きつての「日常の生活」の称揚は、膨大な戦死者が生み出される総力戦の時代においては、身近な者を喪った多くの国民の心を、厭戦から反戦へといざないかねない危険性を持つものであった。したがって加納実紀代が指摘するように、国防婦人会のような草の根

の援護組織を通じて戦死者遺族の反戦感情を監視するとともに、様々な教育・宣伝を通じて国民に「非常時」「戦時」意識を持たせることこそが、総力戦時代の重要な「思想戦」であった（加納、二〇〇五）。だが「新しい戦争」は、むしろ国民が「平時」意識を持つことの上にこそ遂行される。ヘテロリストン⁴として敵から正当性を奪うことが可能になるのは、敵が「戦時」でもないのに「日常の生活」を脅かそうとする者であるからこそ、なのだから。ステルス戦闘機を保有し得る富が特定の地域に集中するような、コロナアルな経済秩序を日々再生産する「平時」は、すでに／つねに巨大な銃後⁵である以上、あらためて「戦時」意識を高揚させる必要はない。ラムズフェルドはそのことを良く知っているかのようなのである。「この戦闘で着用される制服は、砂漠用のカモフラージュ戦闘服だけではありません。銀行の役員が着用するピンストライプのスーツも、プログラマーの普段着も、どれもが立派な制服なのです」⁴

したがって「戦時（前線／銃後）」／「平時」、という区分は、「新しい戦争」においては有効ではない。「新しい戦争」は、「平時」の中にモザイクのように埋め込まれ、「日常の生活」のすばらしさを称揚しつつ遂行される。「戦時」ではない以上、「兵士」となることは必ずしもへすべての男性国民の義務⁶になる必要はない。イラク戦争では、市民権申請の優遇措置を求めて米軍に入隊した三万七千人にもほる移民兵士（いわゆる「グリーンカード兵士」）の存在が注目を集めた。いまや「兵士」とは、コロナアルな経済秩序の再生産、というへ日常に埋め込まれた戦争⁷において、銀行員やプログラマーのようなへ割の良い位置を占めることのできない者が、男女を問わず着かざるを得ないポジションなのである。

3. 「ファルス回復運動」としての戦争暴力

以上のように、「兵士」は戦争暴力を通じてコロナアルな経済秩序の拡大再生産に寄与し、そのコロナアルな経済秩序によって周縁化された者たちが、よりよい生活を求めて「帝国」への移民となり、「兵士」になっていく。女性の出産の動員は行われずとも「兵士」は再生産され、「兵士」となることはもはやへすべての男性国民の義務⁸ではない。「新しい戦争」とはジェンダーレスな暴力なのだろうか？

だが実は近代国民国家の成立以降においても、大部分の時期において、「兵士」となることはへすべての男性国民の義務⁹ではなかつた——実態としては。たとえば加藤陽子によると、日本では一八八九（明治二二）年に徴兵令の免役条項（家督相続者であること等）が廃止されて以降も、「官立府県立師範学校の卒業生で官公立の小学校の教職にある者は、官費で六週間の入営訓練を受ければその後

は実質上召集されることはない」という「六週間現役兵制」（のち「一箇年現役兵制」に変更）、あるいは、海外滞在者が三二歳を越え

た場合には実質上免役となる、などの抜け道が存在した。いうまでもなく、就学機会にも恵まれない貧困層はこのような抜け道を利用できず、その結果、吉野作造のような被支配層に関心を寄せる平等主義者ほど徴兵の全男性への公平な徹底を主張する、という逆説的な状況が生じていた（加藤陽子、一九九八）。

つまりこれまでの歴史においてもずっと、実際に「兵士」となっていたのは男性間格差のなかで周縁化された男性であった（もちろん、第二次世界大戦末期のような大量の兵力動員が行われた時期には、格差はかなり縮小したが）。しかしそれゆえにこそ「兵士になること」は、周縁化された男性が自分たちこそ「真の男性」だと主張し得る希少な場面として、男性性と強く結び付けられてきた。土佐弘之が指摘するように、性暴力を含む戦時暴力は、対象（＝女性）の破壊を通じての男性たちの「ファルス回復運動」の様相を持っている（土佐、二〇〇三b）。

ならば「グリーンカード兵士」のように、「兵士」の周縁性がより強まっている現在は、「ファルス回復」の欲望はより苛烈さを増すはずである。実際、軍事ハイテク化によっていわゆる「きれいな戦争」が可能になりながら、一方ではボスニアなどでのような戦時性暴力の激化がみられるという「矛盾」は、「ファルス回復」の欲望が苛烈化していることを示唆している（土佐、二〇〇三a）。一見、「兵士」と男性性との結びつきとは矛盾するように思えるアブグレイブでの女性兵士によるイラク人拘束者虐待事件も、この「ファルス回復運動」の苛烈化の一環として理解することが可能である。女性兵士は、女性であるがゆえに他の男性兵士以上に一層苛烈に「ファルス回復」（対象をフェミニナイズすることによる、男性性の獲得）をはかったのだとは言えないだろうか？　そしてその場にいた他の男性兵士もまた、女性兵士をけしかけ、イラク人拘束者をへ女に辱められた、女以下の存在に貶めることで、自らの「ファルス回復」を行おうとしていたと言えるのではないだろうか？　「新しい戦争」はジェンダーレス化するどころか、むしろその男性性回復運動としての様相を苛烈化させているのである。

男性性の権力作用とは、解剖学的な知によって男性とされる者の、全員にある種の権力を付与する、というものでは決してない。「真の男性」というものが、解剖学的な知によって男性とされる者全員を包含することがつねにできないからこそ、自らも／自らこそが「真の男性」であるか否かをめぐる、男性間の権力関係と闘争が不断に生み出されるのである。戦時暴力に代表される剥き出しの暴力が発動されるのは、自らこそが「真の男性」であることは、解剖学的知によって自明なことなどでは決してなく、何らかの対象をフェミニナイズするという行為を通じてはじめて証明され得ることだからなのである（海妻、二〇〇五a）。男性間格差こそが男性性の権力作用の源泉であるがゆえに、「男性でありながら周縁化されている者」の増加、という、一見ジェンダー秩序のゆらぎのように見え

る現象は、男性性の権力作用の再編ではあっても崩壊ではない。むしろある種の強化にこそ、つながっていくものだとと言えるのである。

4. 新たな「再生産」論の必要性

現在、男性間の格差は、ネオリベラリズムによって拡大されつつある。日本においても、一九九〇年には二〇パーセントであった一五歳から二四歳までの男性の非正規雇用者比率は、二〇〇四年には四〇パーセントを越えるまでになっている。⁹⁾

このような、「新しい戦争」においては「兵士」にならざるを得ないような、周縁化された男性の非正規雇用を吸収している先のひとつに、実に皮肉なことであるが、ケアワーカーがある。男性ケアワーカーの増加は、「男こそ女なみになるべきではないか」と問うてきたフェミニズムが、めざしてきた社会変化のひとつであったはずである（伊田、二〇〇五）。だが足立眞理子が指摘するように、ネオリベラリズムは「切り捨てられ使い捨てられつつも滞留する、新しい都市周辺層の産出」、すなわちグローバリゼーションによって「富裕化する専門的賃金労働者層にたいして対応する、日常的・メンテナン斯的個人サービス業の雑多な発生」を生み出している（足立、二〇〇三、一〇二頁）。これらのサービス業はしばしば、他者の感情や身体とかわり得るといふ「やりがい」と引き換えに低賃金を正当化されてしまう、周縁化された労働である（渋谷、二〇〇三）。筆者は別稿において、劣悪な労働環境下で女性介護者を虐待死させた、ある男性ケアワーカーを、アブグレイブの女性兵士の陰画であると指摘した（海妻、二〇〇五b）。コロナルな経済秩序を拡大再生産するネオリベラリズムによって生み出された、対象のフェミニイズを通じて「ファルス回復」をはからずにはいられなかった周縁化された者たちだったという点で、両者は実によく似通っているからである。

アブグレイブの女性兵士の事件は、「男なみ平等」をめざすフェミニズム（NOWに代表される）の戦略の隘路であるとしばしば言われる。しかし逆に「男こそ女なみになるべきではないか」と主張しても、現在の社会状況においては、ネオリベラリズムによる男性の周縁化に回収されて終わりがかねないのだ。「平時」を僭称しつつ遂行されている「新しい戦争」において、「日常の生活」のすばらしさを主張することが、ヘテロリスト）として敵から正当性を奪う「情報戦」に利用回収されてしまうように、生命・身体へのかかわりや日常の重視といういわゆる「再生産」の論理¹⁰⁾が、ケアワーカーの劣悪な労働条件正当化の論理に篡奪され、男性も含めての周縁労働者層形成に利用回収されてしまう。「再生産」の論理が、かつてのようには対抗論理として機能し得なくなっているのである。

このような状況の中で、「ファルス回復運動」としての暴力は一層苛烈化していると考えられる。前節で論じた戦時暴力としてのみならず、DVのような日常に埋め込まれた暴力としても。既述した男性ケアワーカーによる虐待致死事件も、日常に埋め込まれた男性

性暴力の、事例のひとつに数えることができるだろう。そしてこのような男性性暴力の苛烈化は、ともするとそれを解体するための「国家権力の引用」、すなわち警察権力による監視の強化の要請へと人々を向かわせる。多くの場合、暴力の被害者になりやすい女性の要請によって、虐待事件の未然防止から、「テロリスト」の監視に至るまで、様々な暴力の抑止を目的にしての「セキユリティ社会化」が近年推し進められている。監視カメラが街中にあふれ、警察権力が肥大化する。しかしそのことが「新しい戦争」の遂行をより一層容易にし、その結果逆説的にも、ますます「ファルス回復運動」としての暴力の苛烈化を進めている側面も否めないのである。¹⁰⁾

この、「出口なし」にも見える状況を、どこから破っていけばよいのだろうか？ 広範な議論が必要だと思われるが、さしあたって筆者が現在考えていることは、ネオリベリズムによる男性の周縁化に回収されないものへと、「再生産」論を再構築することである。女性のみを焦点を当てる「再生産」論ではなく、「やりがい」と引き換えに低賃金を正当化され、長時間労働で自らの生存そのものの再生産もおぼつかないような、周縁化された男性についての議論を組み込んだ、新たな「再生産」論が必要なのではないだろうか。彼らの生存はどのような権力作用によってかくも再生産を脅かされているのか、についての具体的に明快な説明こそが、彼らを「ファロス回復運動」へのやみくもな欲望から、引き剥がすことができるのではないか。「ファロス回復運動」にはしることは、はからずも自らの生存を脅かすネオリベラルな「帝国」秩序に貢献してしまうことになるのだということ、周縁化された男性に提示し得る新たな「再生産」論。周縁化された男性の怒りと抵抗の対象を、彼らの再生産を脅かしている「帝国」秩序へと、的確に水脈づけることのできる新たな「再生産」論。——その早急な構築が必要であるように、筆者には思われてならないのである。¹¹⁾

註

- 1 ポール・ヴィリリオ「予測が実現したのは残念だ」【FAZ】二〇〇一年九月二〇日号。『哲学クロニクル』二二四号 (<http://www.polylogos.org/chronique/214.htm>) 掲載の中山元の訳文に依拠。
- 2 <http://cyprome.org/mlt-dead-igw.htm#March%202003>による。これに対し、「プレ総力戦」といわれる日露戦争では、約四ヶ月の戦闘で五千人の戦死者を出している（戸部、一九九八、一三五頁）。
- 3 ドナルド・ラムズフェルド「まったく新しい戦争」【ニューヨークタイムズ】二〇〇一年九月二七日号。『哲学クロニクル』二〇八号 (<http://www.polylogos.org/chronique/208.htm>) 掲載の中山元の訳文に依拠。

- 5 『毎日新聞』二〇〇三年四月一九日付記事による。
- 6 シンポジウム発表および本稿では、「フェミニナイズ（あるいはフェミニナイゼーション）」という用語を、「女性性を付与することによって、対象を劣位化する」という含意で用いたが、この用法についてはシンポジウム発表の前後を通じていろいろな意見を頂戴した。一層の検討が必要である概念だと認識しつつ、読者に教示を乞うためにも、あえて本稿でもこの語を使用した。ひとつだけ申し添えさせてもらえば、筆者は決して、ある対象に女性性が付与されることがすべて、その対象の劣位化につながる、と考えているわけではない。
- 7 本稿においては「ファルス回復運動」という土佐弘之の用いた概念を適用して論じた問題を、荻野美穂に対する筆者のインタビュー（荻野、二〇〇四）においては「再男性化」という概念を用いて、やや異なる角度から議論した。二つの概念の違いおよびそれによって生じる視座の違いについては、紙幅の都合上別稿に譲る。また、男らしさの回復運動としての軍事化、というテーマを扱った嚆矢として、伊藤公雄の一連の研究（伊藤、一九九三a、同一九九三b、同二〇〇四）を参照されたい。
- 8 男性性の権力作用が、男性間の権力関係と闘争により生み出されるメカニズムについては別稿（海妻、二〇〇四a、同二〇〇四b）を参照されたい。本稿では詳しく論じることができないが、このメカニズムを組みこんだ概念として「家父長制」概念を再構築する必要があると、筆者は考えている。
- 9 「Honkawa Dale Tribune 社会実情データ図録、コード 3250 パート・アルバイト等非正規雇用者比率（年齢別）の推移」（<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/3250.html>）を参照。
- 10 男性性暴力の解体のための「国家権力の引用」問題については、別稿（海妻、二〇〇四b、同二〇〇五b）を参照されたい。この問題については、「国家権力の引用」をする他には男性性暴力解体の用途がないかのようにわれわれに思わせてしまふ、対抗運動における男性性の問題を考慮していく必要があると筆者は考えている。
- 11 ごくごく試論的にはあるが、新「再生産」論構築の第一歩を別稿（海妻、二〇〇五c）にて試みてみた。読者のご意見ご教示を賜りたい。

引用文献

足立真理子「予めの排除と内なる排除 グローバリゼーションにおけるジェンダー再配置」竹村和子編『ポスト「フェミニズム」』作品社、二〇〇三年、九九―一〇四。

- 伊田久美子「女の『労働』をめぐる試論——『働く』ことの意味」『女性学研究』十二号、大阪女子大学女性学研究センター、二〇〇五年。
- 伊藤公雄「光の帝国・迷宮の革命——鏡のなかのイタリア」青弓社、一九九三年 a。
- 「『男らしさ』のゆくえ——男性文化の文化社会学」新曜社、一九九三年 b。
- 「イタリア・ファシズムと、『男らしさ』」小玉亮子編『現代のエスプリ446 マスキュリニティ／男性性の歴史』至文堂、二〇〇四年、二八一—二二七。
- 海妻径子「『運動』と『男性性』のあいだ——メンズリブ、フェミニズム、そしてニューライト」小玉亮子編『現代のエスプリ446 マスキュリニティ／男性性の歴史』至文堂、二〇〇四年 a、五八一—六八。
- 「『男ではない者』の排除と抵抗 男性性が『運動』に問いかけるもの」『情況』十一月号、情況出版、二〇〇四年 b、一五〇—一五七。
- 「皇太子発言のジェンダー・ポリティクス」『季刊 運動（経験）』一四号、軌跡社、二〇〇五年 a、四八一—五六。
- 「男性性の再編と権力作用／折り重なるフェミニゼーション」『情況』六月号、情況出版、二〇〇五年 b、一八二—一八九。
- 「対抗文化としての『反フェミニナチ』——日本における男性の周縁化とバックラッシュ」『インパクション』一四七号、インパクト出版会、二〇〇五年 c、五六—六五。
- 加納実紀代「『これからの戦争』と女性」『戦後史とジェンダー』インパクト出版会、二〇〇五年、三〇六—三二五。
- 加藤哲郎「グローバルな世界と『私たち』の従軍」『従軍のポリティクス』青弓社、二〇〇四年、九—二六。
- 加藤陽子「反戦思想と徴兵忌避思想の系譜 青木保ほか編『近代日本文化論10 戦争と軍隊』岩波書店、一九九八年、一三三—一五一。
- 荻野美穂「『反射する当事者性』と身体政治 『女性』にとって男性性とはなにか」『情況』十一月号、情況出版、二〇〇四年、二〇—二二九。
- 佐々木陽子「総力戦と女性兵士」青弓社、二〇〇二年。
- 渋谷望「魂の労働」青土社、二〇〇三年。
- 戸部良一「日本の近代 逆説の軍隊」中央公論社、一九九八年。
- 土佐弘之「バックラッシュ（再領域化）の政治と暴力 ホモソーシャルなりアリズムの位相」竹村和子編『ポストフェミニズム』作品社、二〇〇三年 a、一一五—一二九。
- 「安全保障という逆説」青土社、二〇〇三年 b。